1. はじめに

1-1. 作成の動機

留学中、台湾文化センターでアルバイトをしていた。入り口のテーブルにいつも置いてあるのが、無料配布のブックガイドだっだ。「台湾を知るために」を主題に、毎年テーマを変えながら制作されている。持ち運びやすいコンパクトなサイズで、表紙はカラフルにデザインされていた。

内容は高い専門性と親しみやすさを両立させており、訪れる人々は国籍や世代を問わず惹きつけられた。私が手にしたのは「ジェンダー文化」を特集した号で、特に印象的だったのは言葉の「質」である。翻訳者や学者の深い知見が、読者の負担にならない平易な表現で綴られていた。ネット上に曖昧な情報が溢れる現代において、それは信頼できる「知のツール」として大きな魅力を持っていた。

今回の制作にあたり、私はこれまでの学びや生活の中で触れてきた「社会への問題意識」をテーマに据えようと考えていた。しかし、重いテーマだからこそ、「いかに伝えるか」という語りのあり方や、表現の手法が重要になる。そこで、文化センターのブックガイドのように、より多くの人に読んでもらい、話題への関心を高めるため、学問的な言い回しを避けて、親しみやすい文章やレイアウトを取り入れることにした。

そこで私が着目したのは、新たな「語りの場」としての「ミュージアム」である。ミュージアムとは、社会の記憶を編み直す場所だ。誰でも参加できる場の中で、歴史が誰によってどのように語られてきたのかを、対話を通して問い直していく。今回のブックガイドでは、そうした「公共的な対話と再解釈の場」を紹介することにした。幅広い層の人々に対し、「正しい情報」を一方的に押しつけるのではなく、自ら知るための「きっかけ」を届けたいと考えている。

1-2. ミュージアムの定義と方向性

ICOM（国際博物館会議）によるミュージアムの定義は2022年に更新され、新たに「多様性」と「包摂性」というキーワードが強調された。しかし、ここで言う「多様性」という言葉は、時に権力に利用され、結果として包摂に不都合なものを排除する形で現れることもある。そのため、「包摂」という言葉もまた、支配的な規範の中に対象を囲い込むような、抑圧的なイメージを抱かせることがある。

だが、ICOMの文脈における包摂性とは、特定の価値観の中に多様なものを閉じ込めることではない。それは、多様な個人が尊重される「開かれた空間」を前提としたものである。小森真樹は著書『ミュージアムの歴史修正』の中で、ミュージアムを「過去の出来事を『誰が』『どのように』語るのかを問い直す、知的抵抗の場＝フォーラム（対話空間）」と位置づけている。

これまで国家や権力によって固定化されてきた「支配的な物語（ナラティブ）」は、多くの語りを周縁化し、不可視化してきた。本ガイドでは、そうした社会の記憶を編み直すために、誰もが参加し、歴史の語られ方を多角的に問い直せる場としてのミュージアムに注目する。

選定にあたっては、以上の視点を踏まえ、公的な名称や制度上の枠組みにとらわれず、「研究、収集、保存、解釈、展示」という機能を持つ場を広い意味でのミュージアムとして扱った。その上で、語り直す権利の再分配を目指し、本ガイドで紹介するミュージアムは、これまでに「語られてこなかった」物語に触れることができる場所を優先して選定した。

1-3. テーマと対象

1-1と1-2では、ブックガイドの表現手法と、ミュージアムという空間の方向性について述べた。ここでは、具体的なテーマと想定する読者について整理する。

本ガイドが、日本による植民地統治の記憶を扱うミュージアムに着目するのは、単なる歴史への反省や責任追及のためではない。それらの空間を通して台湾の現在を捉え、近年の民間レベルにおける「記憶の編み直し」の動きを考えることにある。

日本での生活や交流のなかで、台湾について大きく二つの疑問に触れてきた。一つは、「なぜ台湾は韓国や中国と同様に植民地支配を経験しながら、親日的なのか」という質問で、台湾に好意的でありながら歴史的背景をあまり知らない人から向けられるものである。もう一つは、台湾政治を台湾ナショナリズムと中華ナショナリズムの二項対立で捉えたうえで、「リベラルな価値を重んじる台湾の進歩派が、なぜ保守的な日本政府と良好な関係を維持しているのか」という、「親日」への疑念である。

中国や韓国の歴史と比べ、日本の戦後教育において台湾が取り上げられる内容は極めて少ない。一方で、メディアでは日台交流における「親日」のイメージが繰り返し強調されてきた。しかし近年、こうした既存の言説に疑問を持ち、台湾をより理解しようとする学生が増えている。しかしながら、台湾は国際的な地位や国民国家

としての枠組みという点において、依然として曖昧な立場に置かれている。孤立を避けながらも主体性を保つというその条件のなかで、歴史経験をどのように振り返り、その構造をどう読み解くのか。

台湾の民間が近年取り組んでいる具体的な動きに目を向けると、歴史の見直しが必ずしも政治的な動機に由来するものではないことがわかる。台湾社会が「曖昧さ」のなかに置かれ、社会的な価値観がいまだ定まりきっていないからこそ、より多くの対話と問い直しが生まれているのではないだろうか。

これら二つの文脈における「親日」の背景を、安易な答えで括ることはできないが、それを考えるための手がかりを共有するとはできる。本ガイドでは、植民地統治の記憶というテーマを軸にして、台湾をより深く知ろうとする人に向けて、事実に基づいた情報を提示する。

2. 作品の紹介

2.1 作品の構成

本ガイドで紹介するミュージアムは、台湾新文化運動記念館、湯徳章故居から湯徳章記念公園へ、戦争と和平記念公園主題館、紅毛城安保堂、楽生院の順に構成されている。それぞれの紹介にあたっては、各館ごとに異なるテーマを意識して執筆した。

「台湾新文化運動記念館」では、植民地における近代性を取り上げ、当時の文化運動を中心に生まれた主体性の思考に焦点を当てた。植民者の視点を離れ、世界性・近代性・台湾性という三つの側面への希求を改めて辿り直す。

「湯徳章故居から湯徳章記念公園へ」では、アイデンティティの交錯を見ていく。湯徳章の物語を通して、台湾全体の歴史経験を照射することができる。空間を通じて見えてくるのは、台湾・台湾人が自らの物語を自らの言葉で語る権利を持つことの困難さである。

「戦争と和平記念公園主題館」では、重層性と両義性をキーワードとした。植民地という背景のもとで台湾もまた戦争に参加しており、その記憶には複数のアイデンティティや属性が重なり、矛盾をはらんでいる。個人の記憶を起点に、支配的なナラティブやモデルストーリーからいかに距離を取り、対話の空間を再び開くことができるのかを探る。

「紅毛城と安保堂」では、民俗・歴史・政治という要素の交錯が見られる。この空間は、台湾における「親日」という現象の一言では言い表せない複雑さを象徴し

ているとも言える。しかしそれ以上に重要なのは、「事実に基づいた議論」という対話の前提条件である。

最後に紹介するのが「楽生院」だ。ここでは、空間と記憶の関係が可視化される。楽生院はミュージアムとしての位置づけが最も曖昧な場所であり、展示空間の整備は多くの問題を抱えたまま今も途上にある。しかしその状況こそが、本ガイドが一貫して強調してきた「記憶を編み直す場としてのミュージアム」の意義を最もよく体現していると考え、締めくくりの一館として据えることにした。

2-2. 作品の意義

本ブックガイドは、一種の「アドボカシー（advocacy）」であると考えている。アドボカシーとは、ある立場や価値を支持し、社会に変化を促す働きかけのことだ。台湾では「倡議（チャンイー）」と訳され、日常的にもよく耳にする言葉である。日本語では「提唱」や「呼びかけ」に近いが、本書ではこのアドボカシーが持つニュアンスを、あえて「対話」という言葉で捉え直してみたい。

なぜ「対話」と呼ぶのか。それは、アドボカシーのプロセスが「問いを投げ、話題を共有し、相手の考えを聴き、自身の考えを述べる」という形をとるからだ。そこには、知識を持つ側が一方的に教えたり、立場を異にする人と対立したりする姿はない。そうすることで、より広い層の人々へ「倡議」が届くようになると考えている。その場で即座に結論を出したり、相手の考えを変えたりする必要はない。伝えたい価値が対話を通してゆるやかに伝われば、アドボカシーとしての目的は十分に果たされるのである。

このように、ソフトなアドボカシーを通して本書が目指すのは、台湾でこれまで語られてこなかった物語を知るきっかけをつくることだ。社会に対する理解を、固定化された枠組みやモデル化された言説の中に閉じ込めてはならない。本書が紹介するミュージアムの枠を超え、社会全体がより自由で開かれた対話の場へと向かうための契機となること。そこにこそ、本作の意義を置きたいと考えている。

3. 制作にあたり

3-1. ブックデザイン

文については、可能な限り簡潔な表現を心がけた。しかし、背景説明が断片的になったり、文章全体の論点が不明確になったりすることを避けるため、結果としてボリュームが多くこれらの文章をただ羅列して本にするだけでは、多くの読者は

ページを開いた瞬間に本を閉じてしまうだろう。そのため、レイアウトのデザインには少し工夫をした。

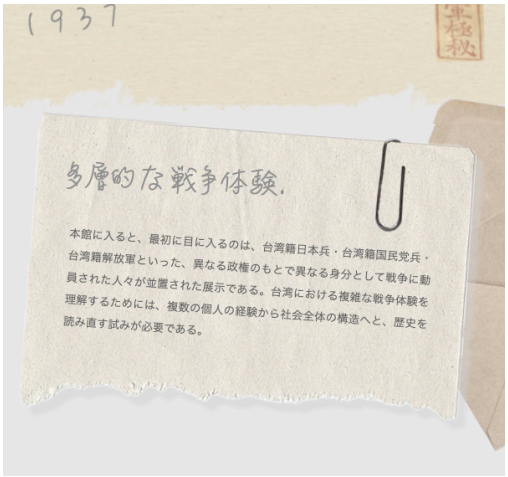
制作にあたり、特に以下のポイントを重視している。

① 読書の負担：同じ文字量であっても、いかに読者に負担を感じさせないか。
② 色： 明るいスタイルを維持しつつ、テーマに合わせて重みのある雰囲気を損なわないこと。
③ イメージ：文章の内容に合わせて写真を配置し、読者が具体的なイメージを抱けるようにすること。
④ 情報の誘導： 読者がより自然に関心を持つには、どのような形で情報を提供すべきか。

具体的な工夫として、まずは配色から着手した。全体に落ち着いた印象を与えるため、背景にはベーシックカラーを採用。その一方で、鮮やかなオレンジとグリーンをアクセントカラーとして対比させることで、視覚的過度に重苦しくなるのを防いだ。

また、文章や図版に合わせて異なる質感の紙テクスチャを背景に配している。こうした手帳風のスタイルを取り入れたデザインにより、内容をより身近なものとして感じさせ、読者の日常生活に寄り添うよう工夫した。





文字表現においては、「読みやすさ」を最優先とし、テキストは基本的に黒を採用した。ただし、純粋な黒は視覚的に強すぎる印象を与えるため、背景に合わせて深みのあるブラウンやグレーへと軽く調整した。また、一見してそれとは分からな

い程度ではあるが、一部の箇所にはドロップシャドウを加え、文字の視認性を高め

「彼ら」を「われわれ」から切り離してからるとと、戦争をめぐる問題は特定の人々に限定されたものとなり、存命人物が殆どいなくなった現在では、すでに過去のものであるかのように思われてしまうかもしれない。しかし、「彼ら」の語りをはじめとする歴史の編み直しは、台湾全体の歴史の再編成とも深く結びついている。

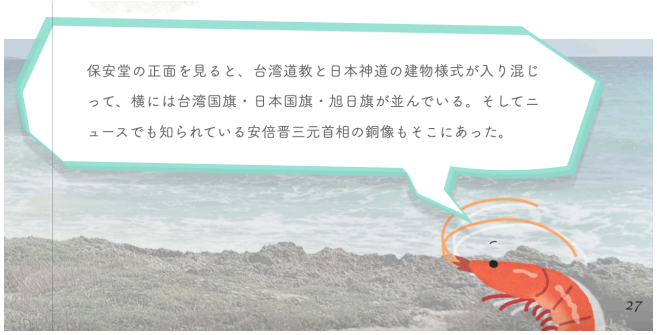
させた。

次に、読者が文章を読み進めながらミュージアムの様子を想像できるよう、中扉に写真を挿入したほか、現地で撮影した写真を素材としてテキストページにも配置した。その際、不透明度を調整することで、視覚的な情報が文章を妨げることなく、デザイン全体に一体感を持たせることができた。

さらに、読者と明るく相方向な関係を築くために、ガイドとしてのキャラクターの「エビさん」を導入した。（このキャラクターは私自身のニックネームをモチーフにしている。）

エビさんが解説を補助することで、以下のような大きなメリットが生まれた：

- 親近感： 話し言葉を用いることで、客観的な文章に人間味を加え、読者との距離を縮めることができた。
- レイアウト： デザインにおいても、エビさんは大きな役割を果たしている。吹き出し形式を採用することで、従来の整然とした文字配置に縛られる必要がなくなった。
- 画面の奥行きと色彩：テキストを紙面のいたるところに自由に配置できるようになり、視覚的にメリハリを生み出すことができた。





最後、情報伝達の方法については、近年の博物館におけるデジタル展示の手法を参考にした。読者が中国語で検索する際の手間を考慮し、博物館の詳細情報や参考文献のリンクをQRコード化している。これにより、関連情報へのアクセス性を高めることができる。

3-2. 制作における困難点と反省点

制作を通じて最も苦労したのは、文章の口調である。制作動機でも触れたように、「高い専門性と親しみやすさを両立させる」という文体は、私が以前読んできたブックガイドで最も心がけ点だった。しかし実際に書き進めるなかで、自分の理論的な基盤の薄さを痛感した。加えて、これまでの日本語による文章経験がほぼレポートに限られていたため、客観的な語り口と主観的な内容のあいだで、中途半端な状態にとどまることが多かった。

エッセイに近い形で書こうと試みても、語彙力の乏しさが壁となり、気づけば論文でよく使われる接続詞や結語ばかりを繰り返していた。それが積み重なると言葉遊びのようになり、いつの間にかテーマから離れてしまうこともあった。

そうした状況に対しては、開き直って作品を仕上げるほかなかったというのが正直なところだ。ただ、この制作を通じて、日常的に書くことの大切さを身をもって感じた。今後は知識を吸収するだけでなく、読んだものや考えたことを文字にする習慣を意識的につけていきたい。また、ここ二年ほどは硬い専門書を読む機会が多かったため、以前好んで読んでいた文学作品に立ち返り、語彙の幅を広げていきたいと思っている。